

『義経千本桜』と狐

木谷蓬吟

〈出典：『浄瑠璃研究書』第一書房、昭和16年3月〉

義経千本桜の表題を分解すると、作者自身も云う通り、義経はきつね（狐）と訓まれるから、謂わば『きつね千本桜』であって、忠信狐の大飛躍が此の浄瑠璃の一勢力を作している。

千本桜と云うは花の吉野の形容辞であるが、その吉野には、昔から狐が多く棲んで居たものか、桜と狐とどんな因縁があるかは知らぬが、兎に角吉野界限には狐の話題が甚しく豊富にある。私が二箇年ばかり吉野山麓、吉野川沿岸の六田のあたりに仮寓した間の経験に徴しても、吉野は桜の名勝であり、また狐の名所であると云う印象が相当に深い。中にも六田から蔵王堂へ登る旧道の五丁目辺には五丁目狐と云う老狐があつて、主として鎧武者の姿に化けて出るという言い伝えが遺っている。

六田の旧渡し場のあつた河原へは、冬の月明の夜など、毎晩のように狐が山から降りて来て、川原で泣いているのを聞いた。上市町に近い吉野川の中洲に、中河原という三四丁続いた木立の深い野原が、狐の巣窟であつたり狐の霊怪談の根拠地でもあつた。白狐を殺した獵師が悶死したとか、狐が枕上に立って予言したとか、うるさい程に斯うした話材が宣伝されている。機織の唄にも、木工の唄にも、子守唄にも狐が登場して居る、山上詣りを相手にした狐ごとの遊戯もある、子供を叱るにも、「狐にやるぞえ」と云っている。

想うに、千本桜の作者竹田出雲、並木千柳、三好松洛等の一行が、著作の材料を求めるため吉野あたりへ実地見学の足を運ばせたに違いない。そして触目触耳の資料を、ウンと詩囊に詰め込んで帰って、やがてそれがこの浄瑠璃となって現われたものであろう。実際の踏査を経ずにはああした作品は生れて来ないと信じる。例えば、参詣道の椎の木茶屋や、木の実落しの土俗、野々熊村や小金吾の芝の地名利用、竹藪の多いこと、いがみの権太型の息子、酌婦上りの女房など、よく此のあたりの郷土色を盛り上げているあたり、参考書や聞き学だけでは描けそうもない。殊に忠信に化けた源九郎狐を縦横無尽に活躍させ得たのも、吉野が狐の本場であることを実際に見聞した感通の賜だつたと思える。

この作者等は、吉野旅行から狐の大きな獲物を得た一方には、作劇法の常套手段として、先ず作者の氏神とする大近松の作品中から、参考資料を求めたと推測する。そこには狐の浄瑠璃として殆ど唯一の『天鼓』を拾い上げたことと信じる。千本桜の狐に関する構想が、主として近松の『天鼓』によっている事は疑う事は可くもない。

天鼓は元禄十四年の大近松の作で、狐の活躍する珍しい浄瑠璃である。この天鼓と云うは伶人富士丸の家宝で、皮は丹州四松の白狐の御台所である千年劫経た女狐の皮で張られ、日本国中の狐の眷族が交替で守護して居るといふ由緒付きの名鼓になっている。出雲はこの天鼓から想を得て、静御前の愛蔵する初音の鼓なるものを作り上げた。そして此の初音の鼓は、大和国に千年の劫を経た夫婦狐の皮を張って作ったものとしている。それでその霊狐の子狐が親狐の恩愛に慕いこがれて忠信の姿に化け、静御前の持つ其鼓の傍を離れず守護す

ると云う趣向を設けたのである。この子狐は源九良狐と呼ばれ、四段目の川連館の場で、静御前の前に親を慕う畜類の情愛を長々と述べる条がある。殆どこの一段の大半を占める長文の独白で、作者苦心の狐物語という異色のもの。語る太夫も狐詞という皮肉な語り風に苦心が払われ、三味線の伴奏にも工夫が積まれ、人形の遣いぶりにも一方ならぬ変化の工作が施されている。寔に異った一段である。

出雲の旧作に『芦屋道満大内鑑』がある。これには本物の葛の葉姫と、それに化けた信田の女狐を配しているが、この千本桜では、本物の忠信とそれに化けた源九良狐とし、女狐を男狐として描き分けた点にも苦心が見える。そしてこの源九良狐の名称も天鼓から採ったもので、近松は天鼓の大詰に全国の著名な霊狐を集めているが、その中に源九良狐の名が見える。これが千本桜に移入されて一躍大名を上げ、今日尚お大和郡山に、源九良稲荷大明神として全国に多くの信者を持っているのも面白い。それに源九良狐の人形の紋所が源氏車に固定されたこと、それが狐場の語り手政太夫の紋であること、この時始めて人形の耳の動く工夫をした吉田文三郎のことなど、多くの文書に紹介されているから省略する。

鮎屋の段では、老主人の名が弥左衛門、その後嗣者が弥助と云う名になって居る。先年、下市の同家を訪うて話し合うたのが宅田弥助翁であつた。かくて弥助の名は代々継承され有名なものであるが、実は此の弥左衛門、弥助の名は、近松の天鼓に由ると、伊賀の上野の弥左衛門狐と其子の弥助狐という名で現われている。出雲は無論この狐親子の名を借って千本桜の鮎屋親子に命名したものであろう。すると鮎屋彌助の名称は『西国名所図解』の編者の「然るに近松義経千本桜の浄瑠璃に此家を用ひしより、諸国に名聞こえし故主人の名さへ改めて鮎屋弥助と呼ぶに至る」とある通り、千本桜流行の影響から生れたものであるかも知れない。

天鼓の浄瑠璃の四段目に、木津川渡し舟の場があり、弥左衛門弥助の親子狐の描写がある。その概要を云うと、木津の渡船客の中に、十五六歳の童が乗り合わせたが、渡船賃を誤魔化して逃げ出すを引捕えると、急用あつて泉州堺へ行く者、我は実は人間ならず、伊賀国に隠れのない上野の弥左衛門狐と呼ばれる老狐の子で、弥助と云う狐であると名乗り、天鼓と申す鼓は丹州四松の白狐の御台所の皮で作られている為め、四松殿の命令で、日本国中の手下狐が三日代りに番を勤めることになっている、それで自分は今堺の寺にある天鼓の番に急ぐのであると、童形忽ち野干と変じ、南を指して飛び去るといふ、無銭狐のお伽話のような一齣が描かれている。

これは狐に直接の関係はないが、浄瑠璃や歌舞伎の舞台面に見受ける、静忠信道行の段は、孰れも桜花爛漫の吉野山になっているが、これは本文とは違っている。現に文楽座でも太夫の語るのを聞くと「桜はまだし枝々の梢さびしき初春の空」と云っている。その場所も大和路であつて、吉野ではない。道行の最後の文章にも「土田六田も遠からぬ野路の春風吹きはらひ、雲と見紛ふ三吉野の麓の里にぞ着きにける」でヤツと麓へ着いたことに描いている。それがいつの程にか舞台効果の勝れた花の盛りの吉野山に変つたのである。これも狐の仕業であらう。